大人が絵本を
第37回　色の魔法、

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

まついのりこ氏がまいた幸せの種

今年２月、絵本界と子どもたちは、大きな財産を喪いました。

明るい色遣いと音の響きで、生後３～４か月の赤ちゃんも、まもなく初誕生日という赤ちゃんも、０歳児みんながニコニコ、キャッキャッと笑うほど、多くの小さな子どもたちに好まれ続けている『じゃあじゃあ びりびり』の作者まついのりこ氏が他界されたことをご存知でしょうか。

鮮やかな赤い14cm角本の表紙中央に、水の一滴したたる蛇口が白い円にくり抜かれて描かれたコンパクトでシンプルな絵本のページをめくると、緑のパステルカラーの背景に、鮮明な黄色い自動車が一台「ぶーぶーぶーぶー」、茶色いパステルカラーの背景には、紺色の犬が一匹「わん わん わん わん」。

『じゃあじゃあ びりびり』
まついのりこ 作・絵
（偕成社）

まつい氏は、この「まついのりこ あかちゃんのほん」シリーズをはじめ、視覚と聴覚で赤ちゃんを喜びへ導き、脳の発育へと促す絵本の数々を、たくさんの家族へ届け、幸せの種をまき続けてくれました。

ブルーナ氏のミッフィーにトキめく子どもたち大人たち

まつい氏の逝去を悼み、心が沈んでいる最中、さらにショッキングな訃報が世界を揺るがしました。ミッフィーの生みの親であるディック・ブルーナ氏の逝去です。1955年に本国オランダで“ナインチェ・ブラウス”の名前で生まれた“子うさぎさん”は、英国での翻訳名“ミッフィー”の名が世界共通に定着し、日本では“うさこちゃん”の愛称で、国境も世代も越えて愛され続けています[1)]。

その独特な表現方法から、「ブルーナカラー」[2)]との呼称が生まれ、赤ちゃんから大人まで、あらゆる世代を惹きつけています。使用する色は、赤、黄、緑、青、茶、グレーの６色のみで、これが独特の世界観を創り出している要素のひとつになっているのです。

『ゆきのひのうさこちゃん』
ディック・ブルーナ 文・絵
石井桃子 訳（福音館書店）

『ゆきのひのうさこちゃん』では、何と背景の空と服の色が同じ青色なのですが、赤いマフラーや帽子と、黄色いソリが差し色となって、物足りなさを感じることなく、印象に残るイラストです。色や線を極限まで減らす手法が見る人々の目を奪い、魅了されるのでしょう。東京オリンピックの年の1964年に日本で初めて紹介されたうさこちゃんは、当時から50年以上がたった今の子どもたちまで、そして、当時子どもだった現在の大人に至るまで、多くの子どもと大人のハートをガッチリとつかんでいるのです。

ブルーナ氏とまつい氏の死は、絵本の世界では大きなダメージを受けましたが、２人がこの世に生みだしてくれた作品は、永く生き続け、未来の子どもたちをも夢中にさせてくれることでしょう。

色の魔力

まつい氏もブルーナ氏も共に、子どもたちと真剣に向き合って創作活動をされてきた２人で、視力が

手にするときは！
絵本作家のしかけ

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

まだ発達していない赤ちゃんが注視してしまう色遣い技法も共通しています。

絵本は、ことばと絵で成り立つものですが、「色は重要な機能を果たす要素」[3] とされるほど、絵本作家やイラストレーターが、赤ちゃん向け、幼児向け、大人向けに駆使する表現方法です。ちひろ美術館常任顧問の松本猛氏は、雑誌「月刊絵本」に連載された卒業論文を加筆・修正して1982年に改訂発行した『絵本論』において、「絵本はさまざまな色調とともに、象徴的な色の効果を画面ごとに変化させることにより、ストーリーや、絵の描写内容とあいまって、絵本のなかで展開する感情表現をさらに効果的に演出することも可能」と述べています[4]。それは写実的な絵でも、抽象的な絵でも同じで、「うさこちゃん」のような原色遣いの平面な絵にも当てはまるものです。

ブルーナカラーの６色にはそれぞれ意味があり、「赤はあたたかい家族とうれしいときの色、黄はぬくもりを感じさせる楽しい気持ちの色、青はよそよそしく冷たい色・不安な気持ち、緑は豊かな自然と生命の色、茶とグレーは必要に迫られて使うようになった色」と、ブルーナ本人を象徴するイメージとしての位置づけをもっているのです[2]。この限られた色だけで表現する手法は、色の背後にあるメッセージの発信がブルーナ氏のこだわりで、ブルーナカラーの特徴だといえます。表面的には至極シンプルな「うさこちゃん」が放つ物語は、色遣いによる深いメッセージがあるのです。このようなことを知ると、「うさこちゃん」を今すぐにでも開いてみたくなりませんか。

赤のチカラ、そして黄色と青

生まれたての新生児の視力は0.02くらいで、ほぼないとされているのですが、色を識別する能力は２か月くらいからとされ、最初に認識する色は「赤」と言われています[5]。赤ちゃん絵本には、リンゴやイチゴ、消防車、赤い風船などの赤いものが多用されていますし、クレヨンや絵の具を題材とした赤・黄・青で構成された絵本もたくさんあります。ブルーナ氏は、赤を「あたたかい家族と、うれしいとき」のイメージ色としました。まつい氏の「あかちゃんのほん」シリーズの表紙・裏表紙が赤色なのは、「あたたかい家族の幸せをどうぞ」のメッセージでしょうか。

また、「人間にとって色彩は単なる色ではなく、赤を見たとき、刺激されて、心にいろいろな感情がセットになって浮かび上がり、特定の心理状態に導く」といいます[6]。うさこちゃんのように世界で活躍を繰り広げている日本生まれの『ぐりとぐら』のぐらは、赤い服がトレードマークですし、『はらぺこあおむし』は、顔が赤です。『ぐりとぐら』の各シリーズ表紙を見ると、自然と赤いぐらに目が引かれてしまうのではないでしょうか。絵本作家たちは赤を効果的に使って、読者を無意識のうちに誘い込むしかけをほどこしているようです。赤をテーマとした代表的な絵本に、その名もズバリ『あかがいちばん』（ほるぷ出版）があり、はじめからおしまいまで、明度と彩度の高い赤が目に飛び込んできます。

色について少し専門的なお話をしますと、赤、オレンジ、黄、青、緑、藍、紫とならぶ層の、端から

『ぐりとぐらとくるりくら』
中川李枝子 作
山川百合子 絵
（福音館書店）

端までの範囲内に分布する色を区別するために使われることばを「色相」といいます。その色相内における色の明るさや暗さの度合いを「明度」と呼び、もっとも高いのは白であり、もっとも低いのは黒になります。この色彩が鮮やかかどうかは「彩度」という言葉で表現され、もっとも高い色は赤・黄・青の三原色で、なかでも黄色がいちばん鮮やかな色とされています[7)]。これらを絵本における色の三要素と論じたドゥーナン氏は、「『色相』よりむしろ『明度』や『彩度』の方が色にこめられた感情を表現します」と述べています[7)]。

『あかがいちばん』では、ブルーナカラーと同様に、使われている色も限られていて、赤、青、黄、緑、茶だけで、しかも青は網掛けで薄く表現され、赤を邪魔しないような工夫もみられるのです。そのうえで明度と彩度の高い、明るく、濃く、鮮やかで強い赤を使うしかけによって、主人公の女の子が大好きな「あかがいちばん」前面に強調され、そのタイトルもイキイキと主張しています。

視覚言語絵本の傑作『あおくんときいろちゃん』

絵本における色の効果を論じるとき、必ずといってよいほど題材にあげられるのは、レオ・レオーニ作『あおくんときいろちゃん』です。『スイミー』や『フレデリック』など、著名な作品ばかりの作家ですので、おそらくレオーニ作品を知らない方はいないのではないでしょうか。『おあおくんときいろちゃん』は、その色そのものの丸で、２人は仲良しすぎてくっついて一緒になったら、青と黄色が合わさって緑になるというストーリーです。

どのページも白い背景の中に２人、もしくは建物や家族がいるのですが、ワンシーンだけ、見開き２ページが塗りこまれた暗いページがあります。見開きの左ページは、色の中で明度も彩度ももっとも低い黒が背景となり、そこに明度の高いあおくんがいるのです。右のページには、赤い背景の中にあおくんが居て、その色の組み合わせは視覚的に落ち着かない感じです。あおくんが遊びたくて、きいろちゃんを訪ねて行くけれど、お家に居ないため捜しまわる「心の乱れが表現された象徴的なページ」と藤本朝巳氏は言います[8)]。色があるべきところに収まっていない現象を「ハレーションを起こす」といい、「輪郭がきちんと描いてあっても、置かれた物があるべき位置より飛び出して見えたり、逆に奥まって見えたりすると空間がねじれてしまう」と藤本氏は解説しています[8)]。

『あおくんときいろちゃん』
レオ・レオーニ 作
藤田圭雄 訳（偕成社）

絵本作家は、単純に絵を描いているのではなく、色の置き方やバランスを測りながら、色の明度と彩度を計算して、あえて合っていない配色を使ったり、不快な色彩をとったりして登場人物の気持ちを表現し、物語の機微を演出しているのです。喜怒哀楽の感情を、丸い色で表現しきったレオ・レオーニ氏は奇才としか思えません。

『あおくんときいろちゃん』について、「視覚言語によるコミュニケーションの可能性を引き出した現代絵本の原点ともいう傑作」と評したのは、武蔵野美術大学芸術文化学科教授の今井良朗氏です[9)]。レオ・レオーニ氏はじめての創作絵本なのですから、底知れない才能を感じます。

色の魔術師エリック・カール

レオーニ氏と同じく、紙を使った独特の色彩表現が特色のエリック・カール氏は、色の魔術師ともよばれ、赤ちゃんの目をも奪う色彩豊かな絵本は、日本でもすべての世代に広く支持されています。『はらぺこあおむし』の赤い頭と顔に、老若男女だれしもが目を向けずにはいられません。

ビブリオベイビー Bibli Baby

連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

絵本の扉をめくった物語最初の見開き左ページが、真っ黒な紙で始まる『うたがみえるよきこえるよ』は、これまた黒一色のバイオリニストが黒ページから出て、右ページに登場します。次のページに進むと、黒いバイオリニストが聴衆に向けて演奏会開演の口上を述べるのですが、絵本の中のことばはこのページだけで、後は絵だけで物語る絵本です。

黒いバイオリニストが弦でバイオリンを弾き始めると、赤・黄・青の小さな玉が生まれ、ページをめくるにつれ、その色がだんだん形となって広がり、そうして彩色された絵が音楽を奏でて、どんどん明るく鮮やかになっていくのです。黒一色で口上を述べたバイオリニストは、演奏後には、明度と彩度の高い、カラフルな姿に変化していますし、最初に登場してきた真っ黒い紙は、心躍るほど色彩鮮やかに描かれていて、その中にピアニストは退場していくのです。見事な演出力です。

演奏前のピアニストを、明度も彩度ももっとも低い黒一色で表現することで、緊張感や不安感といった気持ちを描き、演奏後は演奏しきった安心と達成感を、明度と彩度を効果的に使うことで表出させています。

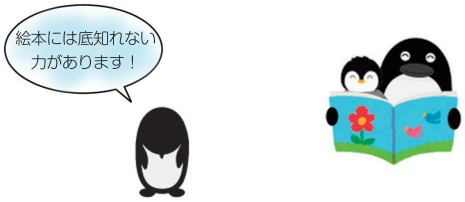
絵本のパワー∞

色とは不思議なものです。あおくんときいろちゃんが仲良しこよしで混ざると緑になっていたなんて、まるでマジックみたいで、ワクワクしてしまいます。これは私たち人間も同じだと思いませんか。一人ひとり異なる色を発信していて、それらが混ざり合うことで新しい色をつくりあげていくのです。「十人十色」とはよく言ったものです。色のしくみを通して、子どもたちへ伝えましょう。ご夫婦やご家族へお話ししましょう。

「１人ではできないことがあれば、２人で色を混ぜ、新しい色になってやってみようよ、２人がムリなら３人で、きっと新しいチャレンジができるよ」。非力な１人も、誰かと力を合わせたらカラーも変わり、可能性は広がるのです。絵本の色がもつパワーを、子どもたちへ、地域の家族へ届けることができるのです。

マルチメディアが発達した時代、大人が安全管理を怠っていると、映像メディア漬けのワナに陥ってしまう危険な社会に子どもたちが置かれているのは周知のとおりです。映像メディアから発信されるデジタルのカラフルな色は生育過程にいる乳幼児の脳の発達を阻害するものでしかありません。それが同じ「色」でも、デジタルでなく紙が発信するとどうでしょう。紙質も含めた生身の色は、人間に本物の体験をさせるだけではなく、これまた生身の声が添えられるだけで脳はイキイキと活動し、それが発育を促すのです。

絵本の底知れない力をまたひとつ、発見できました。



文献

1）森本俊司：ブルーナの人生と創作（別冊太陽「ディック・ブルーナ」），平凡社，東京，2015, pp.60-63.
2）KADOKAWA編：ディック・ブルーナ夢を描き続ける力，KADOKAWA，東京，2015, pp.7-27.
3）藤本朝巳：子どもと絵本，人文書院，東京，2015, pp.29-42.
4）松本猛：絵本論，岩崎書店，東京，1982, pp.106-108.
5）繁田進：乳幼児発達心理学，福村出版，東京，2012, pp.26-27.
6）齋藤勝裕：光と色彩の科学，講談社，東京，2010, pp.144-152.
7）ジェーン・ドゥーナン：絵本の絵を読む，玉川大学出版部，東京，2013, pp.44-51.
8）藤本朝巳：絵本はいかに描かれるか，日本エディタースクール，東京，1999, pp.147-150.
9）中川素子，今井良朗，笹本純：絵本の視覚表現，日本エディタースクール，東京，2001, pp.22-70.